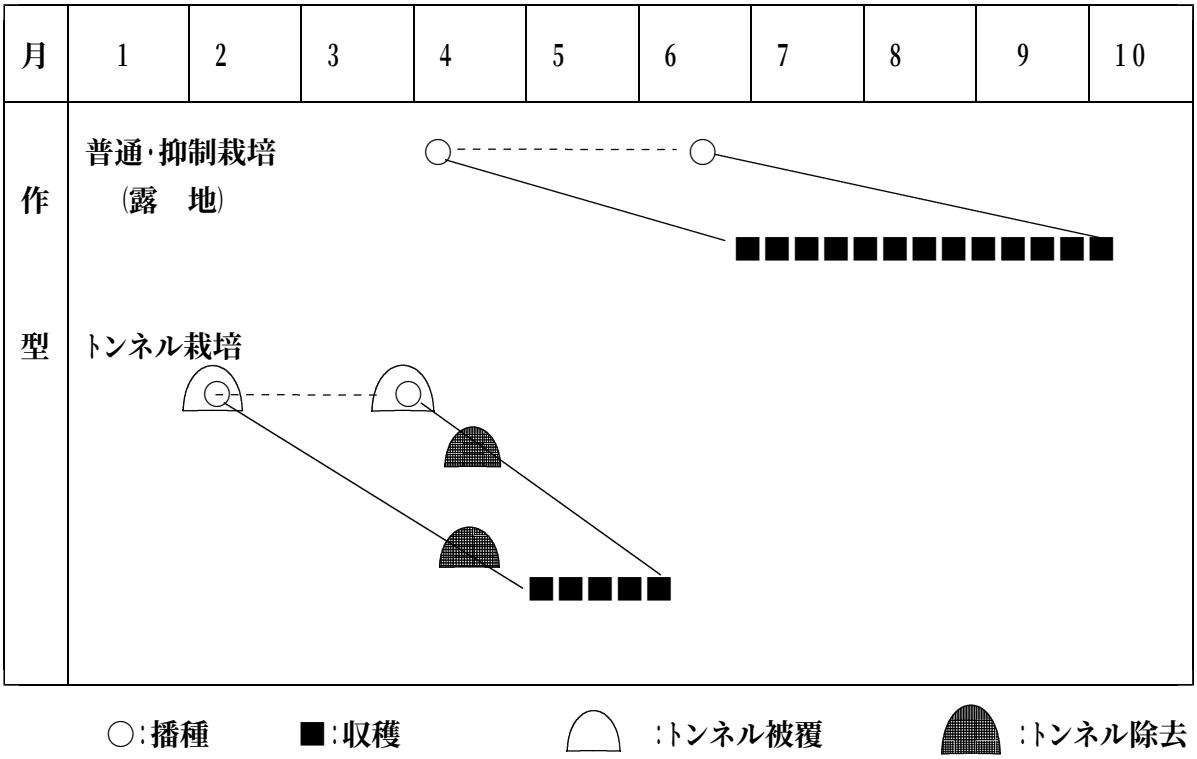
えだまめ

1　作型



アピールポイント

- 出荷時期：5月上旬～10月上旬。
- 露地で4～6月頃に播種し、80～90日後の6～10月の間に出荷するのが一般的ですが、トンネルを利用すると出荷時期が広がります。
- トンネル栽培は、害虫の発生の少ない時期のため、省農薬栽培を行っています。
- 食味の良い地域特産の大豆を用いたえだまめ栽培も行われています。

2　各作型のポイント

(1) 普通･抑制栽培(露地)

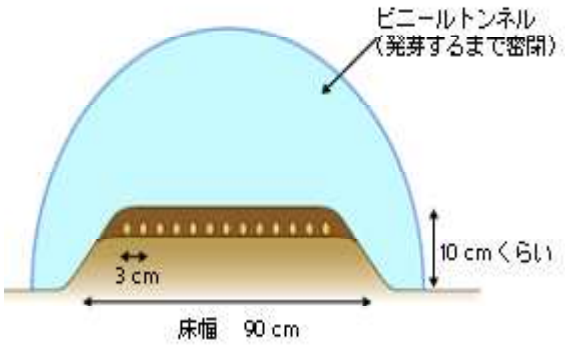
○普通栽培：4月上旬～5月上旬に播種し、6月下旬～8月上旬に収穫する作型です。

7月中旬までに収穫する場合は、極早生品種や早生品種を、それ以降の場合は、中生品種を利用します。

○抑制栽培：6月上～下旬に播種し、8月中旬～10月上旬に収穫する作型です。

晩生品種を利用します。

中耕･培土により初期の雑草を抑えれば、後半はえだまめが繁茂して畑を覆うため、雑草を抑制できます。



(2) トンネル栽培

極早生品種または早生品種を利用します。

播種前に高さ10cm程度のあげ床にマルチを張り、トンネル被覆して地温を上げておきます。

トンネル内が高温になると徒長や受粉障害の原因となるため、発芽後は徐々に換気を行い30℃以上にならないようにします。平均気温15～16℃程度になったらトンネルを除去します。

(3) 各作型共通

播種は1穴に2～3粒まきとし、本葉が展葉する前に間引きを行い1本立ちにします。

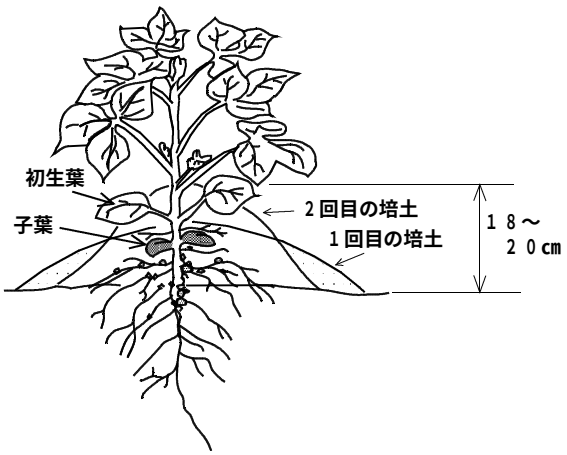
防鳥ネットの設置や白寒冷しゃの全面被覆などにより、防鳥対策を行います。

窒素分が多いと着莢が悪くなるため、前作の残肥を考慮しながら元肥を調節し、生育状況を見ながら追肥を施します。

倒伏防止や除草、根域確保などを目的に、播種後20～30日頃と、その10～15日後の2回に分けて中耕、培土を行います。培土は初生葉節の上を目途に、開花1週間前までに終了します。

開花期に乾燥が続くと落花が多くなったり、空莢が増えたりするため注意が必要です。

培土後の断面図



開花期から子実肥大期にダイズサヤタマバエやマメシンクイガ等の莢害虫の防除を行います。

収穫時期は、開花後35～40日で莢の大分部が充実し、莢が鮮緑のものを収穫します。収穫が遅れると子実が硬くなり、莢が黄変して風味が悪くなるため適期収穫に努めます。